

65. 彦根市城町円常寺遺跡の概要

1

今回試掘調査の対象となった地点は、彦根市城町二丁目目円常寺56番10・同字薬屋敷30番3・30番4である。この地は、北東に特別史跡「彦根城跡」を望む。彦根市史によれば、外濠に面し百石クラスの武家屋敷があった所とされている。

調査の発端は、カネボウの社宅の一部をカネボウハウジング㈱が買収し分譲住宅地の造成を計画した事である。この為に、事前発掘調査の計画がなされ、彦根市教育委員会が調査主体となり、調査機関として彦根市埋蔵文化財発掘調査団に調査を委託する事になった。

元来、考古学において中近世の調査、研究は非常に遅れており、それが注目される様になったのはここ10年来である。この事は、特別史跡「彦根城跡」及び彦根城の城下町においても例外ではない。その事例は昭和54年夏に実施された市立西中学校々舎改築に伴う発掘調査1例を数えるのみである。

この様に、彦根城及び城下町の考古学的実体は不明であるので、今回の試掘調査の主目的を、遺構の有無を確認することに先ずおいた。又、遺構が残存した場合は、その深さ及び残存の状態を確認する事とした。それゆえに、調査地域を遺構の残存がある程度予想される畑地に限定し、社宅が建てられていた所を除外した。調査の方法もこの目的にかなうトレンチ掘りとした。

2

先ず、調査区域の全体的な土層を記せば、畑地である関係で表土は耕作土である。第2層は黄灰色土層が約20cmであり、この層までは畑地の土層であると考えられる。この層以降は、遺物・炭焼け土・山土等が混じった埋め立ての層(整地層)で、遺構面は2時期ある事が確認できた。この2時期の遺構面のうちの下の面も地山ではなく、遺物を含んだ整地層であり、遺構の無い3トレンチでこの下を掘り下げた。その結果は、砂層(川もしくは湖岸で見られる。)となり、水がしみ出して来た。

次に各トレンチの状況を記す。

<1トレンチ>

カネボウ社宅より芹川方向に走る小道の東南側の畑



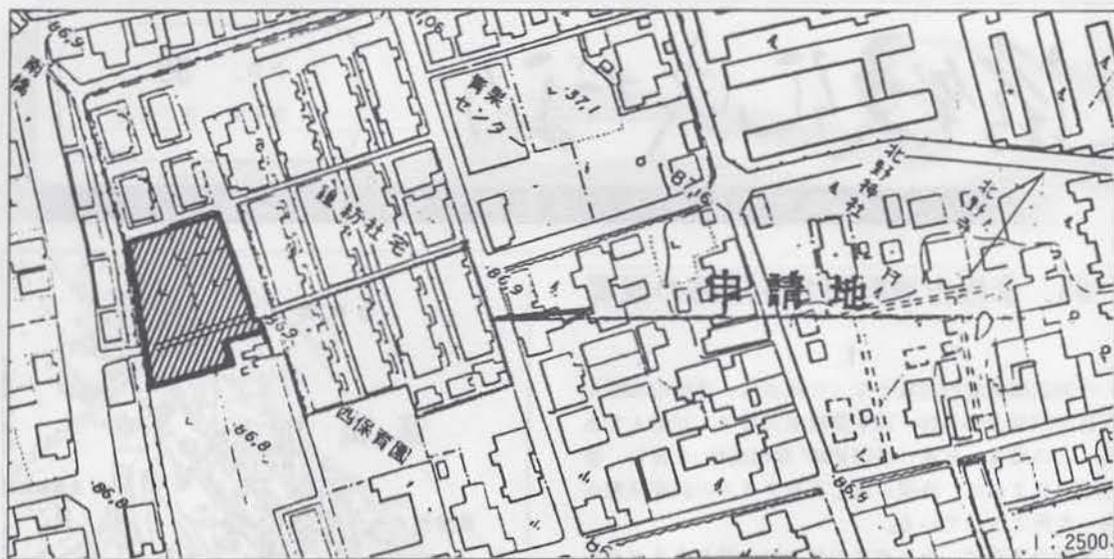
地に設定した。この畑地は、井戸・貯水塔等の構造物が多く遺構の残存状態はあまり良くないと推定された。トレンチもこれ等の構造物の関係上「L」字型となった。

土層は、耕作土をユンボにて掘り込み、黄褐色粘土層の上面で一旦止めたが、この黄褐色粘土層は巾5mほどで切れる。これより北東側は、遺物の混じった整地層となる。この整地層を焼け土が面的に広がる所まで約50cmほど下げた。この面では焼け土の他に「タタキ土」の破片が検出された。他に遺構はなく、再度人手にて掘り下げる。地表より70cmほど下げた時点で人頭大程の石列が出て来る。

1トレンチの主な遺構は、前記した石列であるが、トレンチ全体の状態を先ず書く。

トレンチ南西端は、昭和35年に埋めた水路が確認され、それに切られて黄褐色粘土の土塁状の遺構が検出された。この部分はごみ穴による攪乱が激しい。タタキ土が検出された面は、第2次の遺構面と考えられ、このタタキ土は湾曲を持っており容器の破片と考えられる。第1次の遺構面で検出された石列は、人頭大で平べったい石を残存状態の良い所で二段に積んであった。石の代りに瓦を立てた所もあり、1トレンチの中で7m程の長さである。

<2トレンチ>



このトレンチでは、はっきりと2面の遺構面が認められた。

土塁状の遺構は、1トレンチでは攪乱の為に中が不明であったが、2トレンチで確認され、約6mを計る。又、この土塁を断ち割ったが、板築状ではなく、下層の淡灰黄色粘土層と上層の黄褐色粘土層を台型状に盛ったものであった。下層中よりは、馬の骨と思われる骨が出土し、地山ではない事が確認された。

第2次遺構面は、トレンチ中央より北東側に広がり、人頭よりやや大きい石を用いた石列が2mの長さで検出された。この石列の石は焼けており、この付近は炭、焼け土が広がっていた。又、この同一面で、穴の中に鉢を伏せ、回りを石と瓦片で囲んだ遺構が検出された。この様な遺構は、他に2ヶ所検出されたが、その使用目的は不明である。

第2次の遺構面では、1トレンチで検出された石列の続きと考えられる石列が1m程検出された。他に数個の人頭大の石が出土したが並びに規則性がなく、元の位置を動いたものであろう。

〈3トレンチ〉

水路、土塁状遺構は2トレンチと同様の状態であった。又、第2次の遺構面では、遺構が認められず、第1次の面でも集石以外は、当時のごみ穴と考えられる直径2m程の穴のみであった。この穴の中には、瓦と藁が埋まっていた。集石は、建築物(武家屋敷か)がこわされた時点で一度地表面が整理され、その時に集められたものと考えられる。

〈4トレンチ〉

水路、土塁状遺構は、2・3トレンチと同様の状態で検出された。

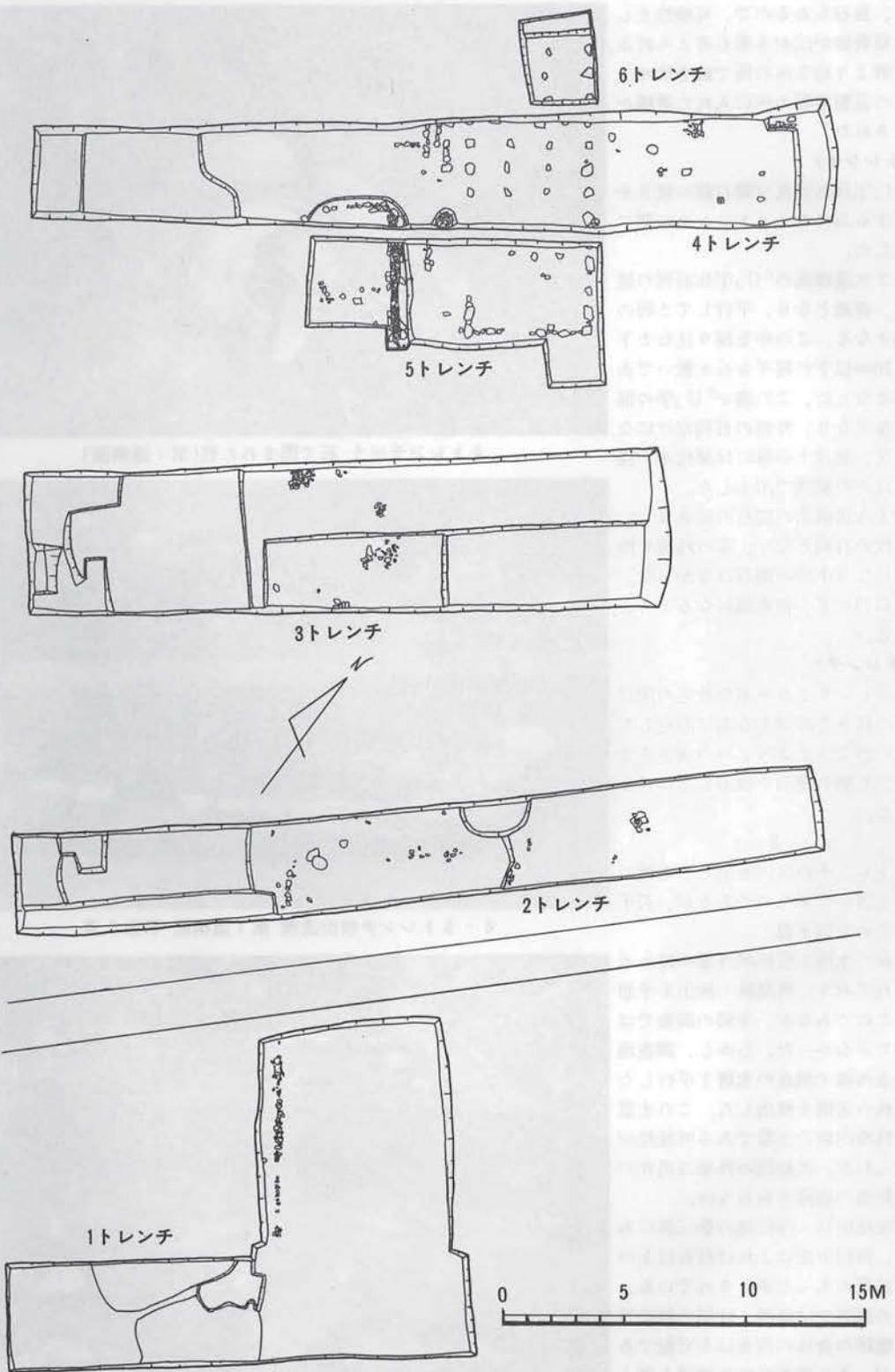
第2次遺構面は、「U」字を半分にした形で断面に半

分かかった石列が検出された。この石列は焼けており、焼け土・炭も10~20cmの厚さで上に乗っていた。石列から約2mはなれた所で底を欠いた壺を伏せ、石、瓦片で囲んだ遺構が検出された。

第1次遺構面では、桁の柱間約1.8m、梁の柱間0.6mの人頭よりやや大きい礎石が検出された。桁行は4間であり、梁間は6間以上の家である。又、この屋敷跡は、土塁とはほぼ平行しており、雨落溝と考えられる2列の平行した石列も検出された。この礎石群より北東側にも同様の石が検出されたが、その多くは動いて



2トレンチ出土 シックイ石で囲まれた鉢(第1遺構面)



彦根市城町円常寺遺跡遺構図

おり、集石もあるので、可能性としては屋敷跡が広がる事も考えられる。礎石群より約3mの所で鉢を伏せ、四角の瓦製容器の中に入れた遺構が検出された。

<5 トレンチ>

「U」字状石列及び礎石群の続きを確認する為に3と4 トレンチの間に設定した。

第2次遺構面の「U」字状石列の続きは、直線となり、平行して2列の石列となる。この中を掘り込むと下には10cm以下の扁平な石が敷いてある溝となった。この溝が「U」字の部分でなくなり、外側の石列だけになる。又、焼け土の層には炭化米が径1mほどの範囲で出土した。

第1次遺構面の礎石の続きは「コ」の字状の石列となり、家の外周を囲む様になり中間の礎石はなかった。この石列が家の南東端になると考えられる。

<6 トレンチ>

4 トレンチとカネボウ社宅の間に礎石の続きを確認する為に設定した。時間のつごうで2×2mの大きさであり、6個の礎石を検出したにとどまった。

3

各トレンチの状況を記し、遺構の状態を書いて来たのであるが、若干のまとめを以下書く。

現在の水路が彦根城外濠の跡と考えられており、外濠跡の検出も予想されたのであるが、今回の調査では確認できなかった。しかし、調査地域の南西端で現在の水跡と平行した土塁状の遺構を検出した。この土塁は、外濠内側の土塁である可能性が考えられる。古絵図の外濠は現在の昭和新道の道路であろうか。

調査地区は、彦根城の第三郭にあたり、彦根市史によれば百石以上の武家屋敷のあった所とされている。今回の調査では範囲、時間の制約等で屋敷跡の全体の調査は不可能であったが、その残存状態の確認と言う当初の目的はたせたと考える。

(本田修平)



4 トレンチ出土 石で囲まれた壺(第1遺構面)



4・5 トレンチ検出遺構 第1遺構面 石敷き溝



4・5 トレンチ建物礎石群(第2遺構面)